

意見陳述書

匿名

「いつてらっしゃい。車に気を付けてよ！」

玄関からマンションの階段を降りて行くのを、姿が見えなくなるまで見送るのが毎朝の日課でした。大きく成長した背中を眺めながら、あと一年もしたら就職をして、我が家から羽ばたいて行ってしまふのかなと嬉しい半面、寂しさもありました。しかし、あの日の息子の後ろ姿を見たのが最期になってしまふとは、どこの家の親も想像したこともないでしょう。

小学校高学年のときの通信表では、「周りにはいつも友達がいて、笑い声が絶えませんでした。大らかで、面倒見の良いところが皆にも認められています」と担任の先生からのお言葉が添えられていました。息子は毎日のように放課後は遊ぶ約束をしては、お友達と遊んでいました。中学と高校では、一日も学校を休まず通うことができました。部活は運動部に入り、上下関係を学び、心身共に鍛え、毎日夜遅くまで仲間との練習に励んでいました。朝、お弁当を手渡すと必ず、「ありがとう」と言ってくれました。それと、私の顔を見れば、「お腹すいた」と言っでは、てんこ盛りのご飯を食べ、食欲

旺盛だったのもこの頃でした。高校の夏休みの三者面談での進路相談のとき、息子は、「小さい子供にスポーツを教える学校に進みたい」と言い出しました。小さい子供が好きというのは意外で、夫婦で驚いたのを覚えています。

おとし四月から、専門学校は横浜まで電車で二時間半かけて、一日も休まず通いました。実習では、小さい子供さんにスイミングや体操を教えたりする教室の補助等をさせてもらっていました。「どんななの？」と私が聞くと、「やっぱりチビ子は可愛いや」と返事が。「でも、ケガをさせないようにね」と会話をしました。実習へ行ったその足でアルバイトへ行く。また他の日は、午前中アルバイトで午後から学校へ。そしてまた夜アルバイトへ行ったりと、ほとんど毎日、家でゆっくりできるという日がなかった子でした。カレンダーにスケジュールを書き込んで、「一日一日やりこなしていかな」とと自分に言い聞かせていました。

一年通った昨年の三月頃。私は「事故もなく、一年間無事に通えたね。クラスに気の合う友達がたくさんいて、学校楽しそうだったね。でもあと一年で卒業だね」と言っただけでした。そして、息子は、「うん、早いなあ」と返事をして、寂しそうな顔をしていたのを覚えています。まだまだ卒業したくなかったのでしょうか。

息子は成人式も楽しみにしていました。久しぶりに中学のときのお友達に会えるのを……。一緒にスーツを選びに行きました。成人した息子の姿を写真に収めたかった。やはり、我が家には町からの成人式の参加のお知らせのハガキは届きませんでした。もう、この世にはいなくなってしまったから。

学生時代最後の今年の三月の卒業式も仕事を休んで、夫婦で見に行く予定でした。男の子は普通、母親と一緒に出掛けるのは恥ずかしがる年頃なのに、私と二人で食事をしに行ったり、買い物にも付き合ってくれていました。今はその場所の前を通ったり、同じ年頃の男の子を見掛けたりするだけでも切ない想いになってしまいます。下駄箱の中のもう履かれることのない靴をボーっと眺めたり、洋服ダンスに残された息子の服の汗のにおいを嗅いで涙が溢れ出したり。もっと家族で食事したかった。もっと一緒にショッピングも行きたかった。もっと息子が運転する車で出掛けたかった。当初、家中飾った息子の写真も今は見るのもつらくなりました。見たら会いたくなる。声を聞きたくなる。もっともって話しいこと、聞きたいこと、いっぱいあった。息子がいなくなつてからの私たち家族は、あの日以来、時が止まってしまいました。どん底に突き落とされたかのように深い絶望感に襲われています。我が子の命を守ってあげられなかった私たちは、一生後悔、そして、もがき、苦しみ続けなければなりません。刑を終えれば加害者は帰ってこれる。しかし、息子は二度と帰ってくることはできません。

帰り道、自宅まであと五分とかからない距離。青信号で渡ったのにもかかわらず、我が子はどうして加害者ともう一台の仲間の車と飲酒運転、無灯火、信号無視、そして、ひき逃げされなくてはならなかったのか。加害者の車に轢かれ、右目とおでこは衝撃で青あざができ、歯も折れ、胸は強打したため、肺からの出血で息もできず、右足は付け根から折れ、

どんなに痛かったか。どんなに苦しかったか。一人で救急車で運ばれたと考えるだけで、胸が張り裂けそうな想いです。

君には分かっているのか。大切な我が子の命を止められた親の悲しみが・・・。

君には分かっているのか。私たち家族だけでなく、大切な人の命を止められた大事な人の苦しい想いが・・・。

加害者本人のツイッターで、自分の車を『殺し屋クラウン』と載せているのを見ました。そんな車に息子は轢かれてしまったんだと思うと、それを見るだけで気分が悪くなります。まさにうちの息子は加害者に殺されたと一緒にではないでしょうか。謝罪文を受け取らなかったからとか、一度鳴らした電話に出なかった等の言い訳で本人は一度も謝罪に来ることもありませんでした。人の命というものを何だと思っているのでしょうか。

そんな加害者を絶対に許すことはできません。加害者の家族も近くに居住し続けているのも望みません。

加害者が同じ過ちを起こさせないために、二度と車のハンドルを握ってほしくありません。加害者を厳罰の実刑に処してください。どうかお願いいたします。